

フワフワと上昇した長期金利と高市政権

26年5月26日(火)

合同会者なおい企画代表

日経CNBCキャスター

直居敦

背景に補正を巡る態度の変化？

- 高市政権のもとで上昇基調が続いていた日本の長期金利
- 足元では上昇ピッチを速め5月18日には2.8%まで上昇。29年半ぶり水準に。
- 補正予算を巡る高市首相の態度の一変が背景？
- これまで補正予算編成の必要性を繰り返し否定
- 中東情勢の巡る取り組みを問われても5月上旬までは否定、もしくは留保。しかし中東情勢は不透明な状態が続く.....。
- 党首討論20日開催が決まり、野党から補正編成迫られるなら先手を打つべき。政府・与党連絡会議で発言を明確に変更。18日。

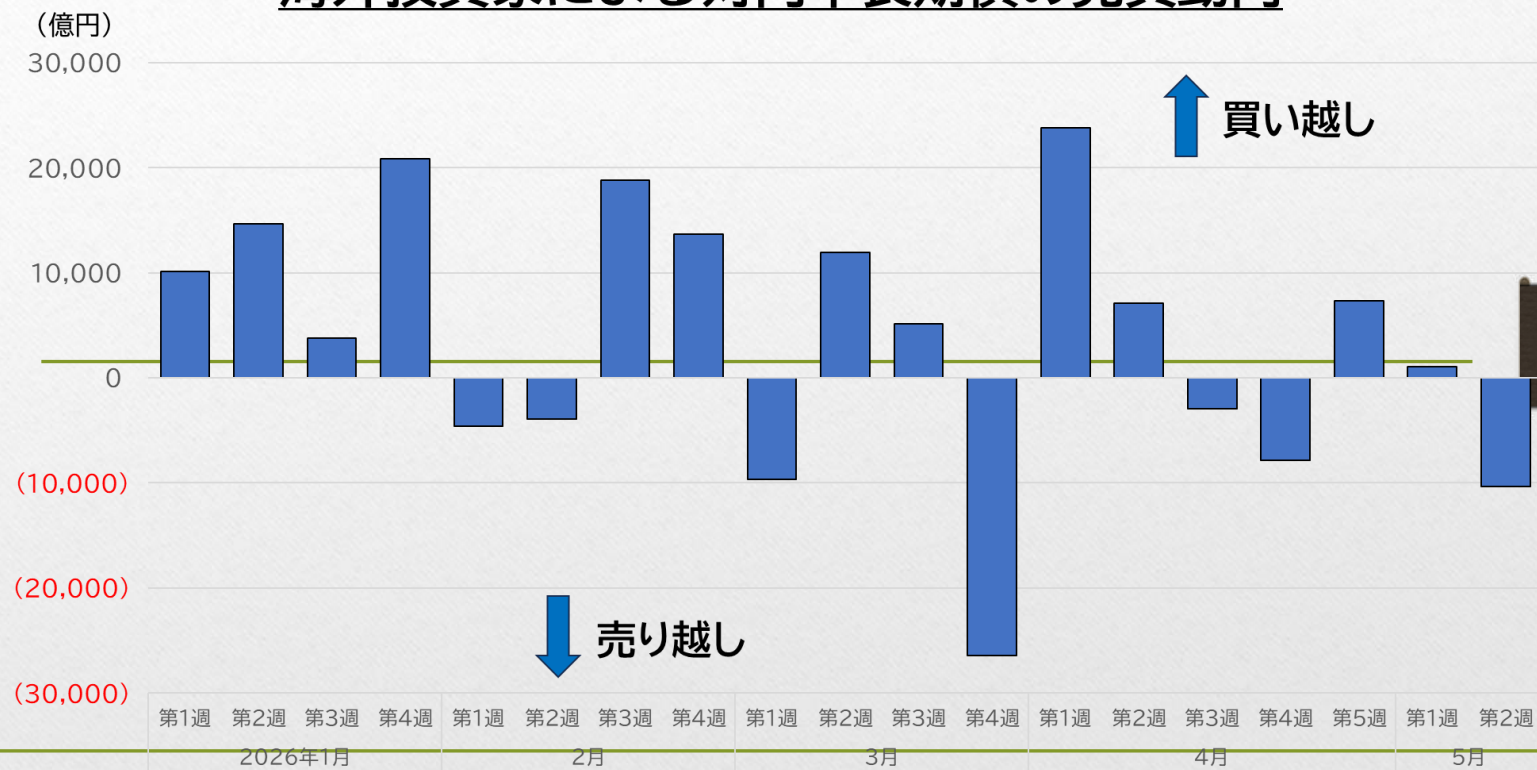
本当に財政不安(補正)を巡る金利上昇だったか？

- 本当に財政不安(補正)を巡る金利の急上昇だったかは、プロの間でも疑問視する声がある。
- 先週5月21日(木)メディア向けセミナーでみずほ証券のチーフストラテジスト、丹治倫敦氏は最近の金利上昇についてインフレ懸念、財政不安などのマクロ要因に基づくものとは考えにくいと分析。「糸の切れた凧」と表現。
- とはいえ、植田日銀総裁も金利の上昇の速さに懸念を示すなかで政権としても意識せざるを得なかった？

高市首相は「責任ある積極財政」を強調

- 26年度補正予算案を編成。歳出規模は3兆円強
- 補正予算の歳入は特例国債(赤字国債)を追加
- ただし、25年度分として26年6月までに発行を予定する赤字国債3兆円分は税込増加などで代替できる
- 市中への発行総額を増やさずに対応。マーケットの信認確保

海外投資家による対内中長期債の売買動向



出所:財務省「対外及び対内証券売買契約等の状況」

そうした中での日経平均6万5000円台

- 高市政権の動きというより、イラン情勢、原油市況、世界的な金利上昇一服のなかで、日本の金利上昇もいったんは止まる。
- 日本の財政はフローでは最もまともと海外からも見られている。米国やフランス、英国などの方がよほど厳しい状況。
- ただ、一定以上の金利上昇に最も弱いのが日本の特徴。低金利下で大量の国債を発行し、その過半を日銀が持つといういびつな構造
- 今のところ、海外勢の株買いも続いており「日本売り」ではない。金利上昇を伴う株価高値更新は業績相場。微妙なバランスではあるが.....。